

令和7年度「函館大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム」自己点検・評価報告書

1 はじめに

本学では、令和6年度より「数理・データサイエンス・AI」に関する知識や基礎的能力を身に付け、変化の激しい社会へ柔軟に対応し、社会の諸問題を解決できる人材の育成を目的とした、「函館大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム」（以降、「教育プログラム」と記載）を実施している。

本教育プログラムは、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会規程」に基づき、以下に示す委員で構成される数理・データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会が管理・運営を担っている。

委員長：教授 西村淳
委員：専任教員7名、事務局1名
教授 田中浩司 委員
教授 永盛恒男 委員
教授 若松裕之 委員
教授 高柳美香 委員
教授 安木新一郎 委員
准教授 鈴木知花 委員
准教授 トーマス・ジョン・ニコラス 委員
事務局 入試事務部長 小原拓也 委員

本教育プログラムは令和6年度から開始し、令和7年度は2年目を迎えた。本教育プログラムについては、必修科目が卒業要件となる学部必修科目であることから、特別な周知は行っていないが、選択科目については、オリエンテーションやポータルサイトから周知を図るなど、科目履修者増を目指した取り組みが行われている。

また、学生による授業評価アンケートに基づき、教務委員会及びFD委員会と連携しながら授業改善等に活かす体制も整えられている。

令和7年度の自己点検・評価については、同委員会規定に基づき、委員会にて点検のうえ総合的に評価したので、以下に報告する。

2 プログラム対象科目

本教育プログラムは、以下の必修科目（計4単位）の修得を必須とし、学生の興味・関心に応じて選択科目の追加履修を推奨している。

区分	科目名	単位数	配当年次	備考
必修科目	情報リテラシー	2	1年次	卒業要件（学部必修）
必修科目	社会とデータサイエンス	2	1年次	卒業要件（学部必修）
選択科目	統計学	2	2年次	
選択科目	微分・積分	2	2年次	
選択科目	地域経済論Ⅰ	2	3年次	
選択科目	地域経済論Ⅱ	2	3年次	

3 自己点検・評価

自己点検・評価は、以下 9 つの観点から実施した。

(1) プログラムの履修・修得状況

学務システム「Campus-Xs」を用いて、必修科目および選択科目の履修・単位修得状況を確認した。

- ・ 必修科目：順調に推移している。
- ・ 選択科目：「統計学」「微分・積分」は 2 年次配当、「地域経済論Ⅰ」「地域経済論Ⅱ」は 3 年次配当である。そのため、現時点で「地域経済論」の履修者はいないが、「微分・積分」においては履修可能学生のおよそ半数が履修・合格にいたった。
- ・ 今後の課題：引き続きプログラムの趣旨を学内に周知し、選択科目のさらなる履修者増を図る。

(2) 学修成果

学生には課題等を課し、各講義科目で設定された「ルーブリック」に基づく課題評価に加え、FD 委員会による授業評価アンケートの「自由意見欄」の分析を通じ、数値に表れない学修成果の把握に努めた

【令和 7 年度 授業評価アンケート結果（全 6 項目・5 点満点）】

- ・ 「情報リテラシー」：4.22 ～ 4.39 （一定の積極的な取組姿勢が見られる）
- ・ 「社会とデータサイエンス」：3.28 ～ 3.89 （改善の余地あり）

評価と課題：

「情報リテラシー」は概ね良好であったが、「社会とデータサイエンス」は学生の興味・関心をさらに高めるための改善が必要である。特に、日常生活のレベルから具体的な活用イメージが湧くような授業内容への見直しを検討する。

(3) 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

授業評価アンケートにおける「聞き取りやすさ」「教材」「板書・スライド・資料」の項目において、「社会とデータサイエンス」の評点が 3.4～3.5 と全体的に低い傾向にあった。

改善策：

学生の学習意欲および理解度向上のため、学修内容が社会やビジネスにおいてどのように活かされているかを具体的に関連付けた授業展開を行う。

(4) 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

- ・ 必修科目：「情報リテラシー」および「社会とデータサイエンス」は学部必修科目であるため、推奨度に関する具体的なコメントは得られなかった。
- ・ 選択科目：配当年次が 2 年次以降であるため、来年度以降にアンケート結果の蓄積を待ち、順次分析を行う。

(5) 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

選択科目の履修率向上を目的として、学内ポータルサイトやオリエンテーションの場を活用し、「数理・データサイエンス・AI を学ぶことのメリット」を具体的に可視化して周知する計画を進めている。

(6) 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムの修了状況は以下の通りである。

- ・ 令和 6 年度入学生：修了者 53 名（修了率 82.8%）
- ・ 令和 7 年度入学生：修了者 50 名（修了率 76.9%）

現時点で本教育プログラムの修了者に卒業生は出ていないため、進路や活躍状況、企業等からの外部評価については、令和 10 年度以降に順次調査を開始する予定である。

(7) 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

上記 (6) と同様の理由（卒業生の未輩出）により、産業界からの視点を含めたプログラム内容・手法への意見聴取については、令和 10 年度以降に実施予定である。

(8) 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムは、社会に即応するための実践力が身に付くよう授業内容を工夫し、学生が到達目

標に向けて主体的に取り組めるよう配慮している。講義の理解度に差が生じないように、初歩的な内容から段階的に展開するステップアップ型の講義設計を行っている。

(9) 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

本プログラムを構成している授業科目の授業評価アンケートに講義の良かったところ、および授業評価アンケートに「良かった点」と「改善点」の自由記載欄を設け、授業改善に活かしている。また、データサイエンス・AI分野の急速な技術革新（トレンドの変遷）を考慮し、年度ごとに講義内容の見直し（アップデート）を行い、内容の陳腐化防止に努めている。

以上